思ひ出の東京[[1]](#footnote-1)

香山光郎（舊名　李光洙）

私が最初東京へ出たのは明治三十八年の夏でした。當時私は十四歳の少年でした。明治四十三年、十九歳の時まで東京で大きくなったのでした。

日露戰爭に大勝利を得た時でありました。東京は今日の東京に比べるとまだ子供でした。電車はありましたが、電燈はまだ普及して居らず、私たちの下宿では石油ランプを使つて居りました。母論道路に舗装などしてなく雨が降るととても濘んで、私も足駄を履きました。朝鮮の学生は八十名ばかり居りました。

日露戦争が濟んでからの東京には、文学上では自然主義の全盛時代が來ました。「現實暴露の悲哀」といふ長谷川天溪氏の著作を讀んで私も一廉の自然主義者になつた氣でゐたのでした。

同時に當時東京ではトルストイやその他のロシヤ文學の飜譯が盛んでありました。學生たちは大變ヨーロツパを崇拜して居りました。

二度目に東京へ私が行つたのは大正四年で大正八年まで即ち歐洲大戰中にゐたのですが、この期間はデモクラシー全盛時代で、歐米式政治思想のもつとも盛んな時あつたでせう。「これデモクラシ、あれデモクラシ（暮）」などいはれたものでした。私は早稲田大學で哲學を勉強してゐましたがカントが主でありました。リツケルト、リップスの論理學やロツエの美學、論理學など讀まされました。

第三回目に私が東京へ行つたのは大正十二年の震災直後で、思想や文學は國粹的な反省と[マ]ルクス主義傾向との二つが萌えて居り[まし]た。

第四回目に行つたのは昭和十年で、家族が足掛三年も東京に行つてゐたので十一年にもまいりました。大震災後起りかけた國粹的な大衆文學が、純文學派の嘲笑を尻目に國民大衆の魂を獲得した時でした。私は短期間ではあるが、虛心坦懐に日本文化、日本精神を味はふことが出來ました。私は昭和十二年のお正月を麻布梅田町の屋敷町の寓居の二階で、富士の姿を眺めながら迎へたのでした[[2]](#footnote-2)。暁の風呂で身を淨めて神に詣りお寺にまゐるといふ日本的なお正月の中に私はふと日本精神を見たのでした。

今度東京へ行つたら、大東亞共栄圏の大都たる東京に行くことゝなるのです。それは明治三十八年の東京よりは幾層倍も大きく美しく權威あり力あり輝きのある東京でせう。

1. 『三千里』1942年1月 [↑](#footnote-ref-1)
2. 昭和十二年とあるのは十一年の記憶違い。三中堂全集の年譜によれば李光洙は昭和十年末に東京に行き、翌年一月に帰国している。また麻布に梅田町という町はない。江戸時代に武家屋敷があった桜田町のことと思われる。 [↑](#footnote-ref-2)